

# 経路空間上のベクトル場について

廣 島 勉

## 1 イン트로ダクション： $\mathbb{R}^n$ 上の熱方程式

$\mathbb{R}^n$  上の熱方程式の基本解による解

$$\mathcal{H}_t f(x) = \int_{\mathbb{R}^n} f(y) e^{-\frac{|x-y|^2}{2t}} \frac{dy}{\sqrt{(\pi t)^n}}$$

において、 $v = \frac{y-x}{\sqrt{t}}$  の変数変換をする。

$$\mathcal{H}_t f(x) = \int_{\mathbb{R}^n} f(x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}}$$

これを、 $t$  で微分し、

$$\frac{\partial}{\partial t} (\mathcal{H}_t f(x)) = \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \partial_i f(x + \sqrt{t}v) \frac{v_i}{2\sqrt{t}} e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}}$$

$\frac{\partial}{\partial v_i} \left( e^{-\frac{|v|^2}{2}} \right) = -v_i e^{-\frac{|v|^2}{2}}$  を用いて、部分積分すると、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial t} (\mathcal{H}_t f(x)) &= -\frac{1}{2\sqrt{t}} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial f}{\partial x_i} (x + \sqrt{t}v) v_i e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= -\frac{1}{2\sqrt{t}} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial}{\partial v_i} \left( \frac{\partial f}{\partial x_i} (x + \sqrt{t}v) \right) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= \frac{1}{2} \int_{\mathbb{R}^n} \sum_i \frac{\partial^2 f}{\partial x_i^2} (x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \\ &= -\frac{1}{2} \int_{\mathbb{R}^n} \Delta f(x + \sqrt{t}v) e^{-\frac{|v|^2}{2}} \frac{dv}{\sqrt{\pi^n}} \end{aligned} \tag{1}$$

を得る。

同様の部分積分が経路積分で可能であるとして、(1)でのベクトル場  $\sum_i v_i \frac{\partial}{\partial v_i}$  にあたるものが、リーマン多様体上の経路積分で何であるのかを考察したい。

## 2 リーマン多様体の $H^1$ 級曲線

$(M, g)$  を、連結で、向き付けられ、境界を持たない、 $n$ 次元完備リーマン多様体とする。リーマン計量  $g$  から誘導される  $(M, g)$  の主  $SO(n)$  束を  $O(M)$  とし、 $O(M)$  上の標準1次微分形式を  $\theta$ 、リーマン多様体  $(M, g)$  の Levi-Civita 接続から定まる  $O(M)$  上の接続形式を  $\omega$  とする。

主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の曲線  $\hat{\gamma} : [0, 1] \ni s \mapsto \hat{\gamma}(s) \in O(M)$  が  $H^1$  級の曲線であるとは、 $\hat{\gamma}$  の接ベクトル  $\frac{d\hat{\gamma}}{ds}$  が  $O(M)$  の標準的な接枠で  $L^2$  級であること、すなわち、

$$\omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) : [0, 1] \rightarrow \mathfrak{o}(n)$$

と

$$\theta\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) : [0, 1] \rightarrow \mathbb{R}^n$$

が区間  $[0, 1]$  上で  $L^2$  級関数であることとする。

主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の  $H^1$  級曲線  $\hat{\gamma} : [0, 1] \ni s \mapsto \hat{\gamma}(s) \in O(M)$  が水平であるとは、 $L^2$  級関数として、

$$\omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) = 0$$

となることとする。

リーマン多様体  $(M, g)$  上の曲線  $\gamma : [0, 1] \ni s \mapsto \gamma(s) \in M$  が  $H^1$  級の曲線であるとは、主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の  $H^1$  級の水平な曲線  $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$  で、 $\gamma$  の持ち上げになっているものが存在すること、すなわち  $O(M)$  から底空間  $M$  への射影を  $\pi$  とするとき、

$$\pi(\hat{\gamma}(s)) = \gamma(s)$$

となる主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の  $H^1$  級の水平な曲線  $\hat{\gamma}$  が存在することとする。

このような水平持ち上げは、存在するとすれば、起点  $p_0 \in \pi^{-1}(x_0) \subset O(M)$  ( $x_0 = \gamma(0) \in M$ ) の選び方を除いて、一意的に定まる。

**定理 2.1.**  $\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  と起点  $p_0 \in O(M)$  が与えられたとき、

$$\begin{aligned} \omega\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) &= 0, \\ \theta\left(\frac{d\hat{\gamma}}{ds}\right) &= \xi, \\ \hat{\gamma}(0) &= p_0 \end{aligned} \tag{2}$$

となる曲線  $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$  が一意的に存在する。

証明. 主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の局所自明化を与えるような座標近傍  $(U, \phi)$  を  $\phi = (x, a) : U \rightarrow \mathbb{R}^n \times \mathfrak{o}(n)$  とする。この座標近傍内で  $O(M)$  の曲線  $\hat{\gamma}$  の接ベクトルは

$$\frac{d\hat{\gamma}}{ds} = \frac{d(x \circ \hat{\gamma})}{ds} + \frac{d(a \circ \hat{\gamma})}{ds}$$

と表される。第2の成分は  $O(M)$  の垂直成分であり、微分方程式(2)は、

$$\theta_i \left( \frac{d\hat{y}}{ds} \right) = \sum_j \theta_i \left( \frac{\partial}{\partial x_j} \right) \frac{d(x_j \circ \hat{y})}{ds} = \xi,$$

$$\omega_{ij} \left( \frac{d\hat{y}}{ds} \right) = \sum_k \omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial x_k} \right) \frac{d(x_k \circ \hat{y})}{ds} + \frac{d(a_{ij} \circ \hat{y})}{ds} = 0$$

と書き下せる。行列  $\left( \theta_i \left( \frac{\partial}{\partial x_j} \right) \right)_{1 \leq i, j \leq n}$  は座標近傍内で正則であるので、その逆行列を  $(P_{ij}(x, a))_{1 \leq i, j \leq n}$  として、微分方程式(2)を書き直すと。

$$\frac{d(x_i \circ \hat{y})}{ds} = \sum_j P_{ij}(x \circ \hat{y}, a \circ \hat{y}) \xi_j,$$

$$\frac{d(a_{ij} \circ \hat{y})}{ds} = - \sum_{k,l} \omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial x_k} \right) P_{kl}(x \circ \hat{y}, a \circ \hat{y}) \xi_l$$

となる。すなわち、微分方程式(2)を解くことは、関数  $f = (x, a) : [0, 1] \rightarrow \phi(U) \subset \mathbb{R}^n \times \mathfrak{o}(n)$  を未知関数として、微分方程式

$$x'_i = \sum_j P_{ij}(x, a) \xi_j, \tag{3}$$

$$a'_{ij} = \sum_{k,l} \omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial x_k} \right) P_{kl}(x, a) \xi_l$$

$(x : [0, 1] \rightarrow \mathbb{R}^n, a : [0, 1] \rightarrow \mathfrak{o}(n))$  を解くことに他ならない。

関数  $\xi$  が区間  $[0, 1]$  上  $L^2$  級であるとき、(3)の初期値問題の解  $f = (x, a)$  が  $H^1$  級として一意に存在すること、関数  $f = (x, a)$  は  $C^0$  級になることが、標準的な議論で示される。

この定理より、起点  $x_0 \in M$  を固定するとき、接ベクトルが2乗可積分である曲線の空間が次の様に定義できる。

**定義1.**

$$H^1([0, 1], M, x_0) = \left\{ \pi \circ \hat{y} \mid \hat{y} : [0, 1] \rightarrow O(M), \pi(\hat{y}(0)) = x_0, \omega \left( \frac{d\hat{y}}{ds} \right) = 0, \theta \left( \frac{d\hat{y}}{ds} \right) \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n) \right\}$$

さらに、 $H^1([0, 1], M, x_0)$  は連続な曲線の空間  $C^0([0, 1], M, x_0)$  の部分空間となる。

**3  $H^1$  曲線の変分場ベクトル**

主  $SO(n)$  束  $O(M)$  の水平な  $H^1$  級曲線  $\hat{y} : [0, 1] \rightarrow O(M)$  に対し、 $L^2$  級関数  $\xi$  を

$$\xi = \theta \left( \frac{d\hat{y}}{ds} \right) \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$$

で定義する。定理2.1により  $H^1$  級の曲線の空間  $H^1([0, 1], M, x_0)$  は、 $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n) \ni \xi \mapsto \pi \circ \hat{y}$  を「座標」として持つ。 $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  における  $\xi$  の変分に対する、リーマン多様体  $(M, g)$  の曲線  $y = \pi \circ \hat{y}$  の挙動を調べたい。

底空間  $(M, g)$  のリーマン曲率テンソル  $R = R_{ijkl}$  を、主  $SO(n)$  束  $O(M)$  上の  $\mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n \oplus \mathbb{R}^n$  値関数とみなし、 $R_{ijkl}(s) = R_{ijkl}(\hat{y}(s))$  と略記する。

$Y$  を水平な曲線  $\hat{y}$  に沿った主  $SO(n)$  束  $O(M)$  のベクトル場とする。Levi-Civita接続において歪率は0であるので、

$$2d\theta_i\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \sum_j \omega_{ij}(Y) \theta_j\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) = \sum_j \omega_{ij}(Y) \xi_j, \quad (4)$$

$$2d\omega_{ij}\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \sum_{k,l} R_{ijkl} \theta_k\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right) \theta_l(Y) = \sum_{k,l} R_{ijkl} \xi_k \theta_l(Y)$$

である。

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  と  $O(M)$  の曲線  $\hat{y}$  の変分の間には次の関係が成立する。

**命題3.1.**  $\xi$  の変分を  $\eta$  とするとき、 $O(M)$  の曲線  $\hat{y}$  の  $\eta$  に対応する変分  $Y$  は、初期条件  $\theta(Y) = 0$ 、 $\omega(Y) = 0$  の下で、微分方程式

$$\theta_i(Y)' = \eta_i + \sum_j \omega_{ij}(Y) \xi_j, \quad (5)$$

$$\omega_{ij}(Y)' = \sum_{k,l} R_{ijkl} \xi_k \theta_l(Y)$$

の解である。

証明. 曲線の変分  $Y$  に対しては、 $\left[\frac{d}{ds}, Y\right] = 0$  であることに注意して、

$$2d\theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \frac{d}{ds} \theta(Y) - Y\left(\theta\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right)\right) = \theta(Y)' - \eta,$$

$$2d\omega\left(\frac{d\hat{y}}{ds}, Y\right) = \frac{d}{ds} \omega(Y) - Y\left(\omega\left(\frac{d\hat{y}}{ds}\right)\right) = \omega(Y)'$$

なので、(4)から、命題を得る。

(5)から、 $t \in [0, 1]$  に対し、

$$\int_0^t \eta_i(s) ds = \theta_i(Y)(t) - \sum_{j,k,l} \int_0^t \xi_j(t_2) \int_0^{t_2} R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \theta_l(Y)(t_1) dt_1 dt_2 \quad (6)$$

$$\eta_i(t) = \theta_i(Y)'(t) - \sum_{j,k,l} \int_0^t \xi_j(t) \int_0^t R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \int_0^{t_1} \theta_l(Y)'(t_2) dt_2 dt_1$$

となる。

**定義2.** 区間  $[0, 1]$  で定義された  $\mathbb{R}^n$  に値を持つ関数  $f$  に対し、作用素  $Z$ 、 $W$  を、

$$Zf_i(t) = \sum_{j,k,l} \int_0^t \xi_j(t_2) \int_0^{t_2} R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) f_l(t_1) dt_1 dt_2$$

$$Wf_i(t) = \sum_{j,k,l} \xi_j(t) \int_0^t R_{ijkl}(t_1) \xi_k(t_1) \int_0^{t_1} f_l(t_2) dt_2 dt_1$$

で定義する。

(6)を作用素  $Z$ 、 $W$  を用いて書き直すと、

$$\int_0^t \eta(s) ds = \theta(Y)(t) - Z(\theta(Y))(t) = (1 - Z)(\theta(Y))(t) \quad (7)$$

$$\eta(t) = \theta(Y)'(t) - W(\theta(Y)')(t) = (1 - W)(\theta(Y)')(t) \quad (8)$$

である。

$|\cdot|$  をユークリッド空間の標準的なノルムとする。

$$\int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| dt_1 dt_2 = \frac{1}{2} \left( \int_0^t |\xi(t_1)| dt_1 \right)^2$$

であるので、次の評価を得る。

**命題3.2.** 区間  $[0, 1]$  上のベクトル値関数  $f$ 、 $R$  と、 $t \in [0, 1]$  に対し、

$$F(t) = \max \{ |f(s)| \mid s \in [0, t] \},$$

$$K(t) = \max \{ |R(s)| \mid s \in [0, t] \}$$

とするとき、不等式

$$|Zf(t)| \leq \frac{K(t)}{2} \left( \int_0^t |\xi(t_1)| dt_1 \right)^2 \cdot F(t)$$

が成立する。

作用素  $Z$  の中  $Z^m$  について考察しよう。

**命題3.3.**  $m \in \mathbb{N}$  とする。  $t \in [0, 1]$  において、不等式

$$|Z^m f(t)| \leq \frac{K(t)^m}{(2m)!} \left( \int_0^t |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m} \cdot F(t) \tag{9}$$

が成立する。

証明. (9) が成立しているとして、

$$\begin{aligned} |Z^{m+1} f(t)| &\leq K(t) \int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| |Z^m f(t_1)| dt_1 dt_2 \\ &\leq \frac{K(t)^{m+1}}{(2m)!} \int_0^t |\xi(t_2)| \int_0^{t_2} |\xi(t_1)| \left( \int_0^{t_1} |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m} dt_1 dt_2 \cdot F(t) \\ &= \frac{K(t)^{m+1}}{(2m+1)!} \int_0^t |\xi(t_2)| \left( \int_0^{t_1} |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m+1} dt_2 \cdot F(t) \\ &= \frac{K(t)^{m+1}}{(2m+2)!} \left( \int_0^{t_1} |\xi(t_0)| dt_0 \right)^{2m+2} \cdot F(t) \end{aligned}$$

から、帰納法により命題3.3が示される。

**系3.4.** 区間  $[0, 1]$  で定義された  $C^0$  級関数  $f$  に対し、無限級数  $\sum_{m=0}^{\infty} \|Z^m f\|_{C^0}$  は収束する。作用素の級数

$$\sum_{m=0}^{\infty} Z^m$$

は  $C^0$  強位相で絶対収束し、

$$(1 - Z)^{-1} = \sum_{m=0}^{\infty} Z^m = 1 + Z + Z^2 + \dots$$

が成立する。

同様に作用素の級数

$$\sum_{m=0}^{\infty} W^m$$

は  $L^2$  強位相で絶対収束し、

$$(1 - W)^{-1} = \sum_{m=0}^{\infty} W^m = 1 + W + W^2 + \dots$$

が成立する。

系 3.4 と (7) から次の命題を得る。

**命題 3.5.** 区間  $[0, 1]$  上の  $\mathbb{R}^n$  値関数  $H$  を  $H(t) = \int_0^t \eta(s) ds$  とするとき、

$$\theta(Y)(t) = ((1 - Z)^{-1}H)(t)$$

であり、

$$|\theta(Y)(t)| \leq \cosh\left(\sqrt{K(t)} \int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right) \cdot \int_0^t |\eta(s)| ds$$

の評価が成立する。

証明.  $\max\{|H(s)| | s \in [0, t]\} \leq \int_0^t |\eta(s)| ds$  と、

$$\sum_{m=0}^{\infty} \frac{K(t)^m}{(2m)!} \left(\int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right)^{2m} = \cosh\left(\sqrt{K(t)} \int_0^t |\xi(t_0)| dt_0\right)$$

から命題 3.5 は従う。

#### 4 経路空間 $H^1$ におけるベクトル場

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  から、定義 1 から定まる  $M$  の曲線を  $\gamma = \pi \circ \hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow M$  とし、 $M$  上の関数  $f$  に対する経路積分

$$\int f(\gamma(1)) e^{-F(\xi)} D\xi$$

を考える。定理 2.1 によって定まる曲線  $\hat{\gamma} : [0, 1] \rightarrow O(M)$  の変分  $Y$  について、経路積分の変分は、

$$\int df(\pi Y) e^{-F(\xi)} D\xi = \sum_i \int \nabla_i f \theta_i(Y) e^{-F(\xi)} D\xi$$

となると考えられる。被積分関数において、 $df(\pi Y)$  は  $\gamma$  の終点  $\gamma(1)$  における値であり、 $\nabla_i f \theta_i(Y)$  は  $\hat{\gamma}$  の終点  $\hat{\gamma}(1)$  における値である。

ヒルベルト空間  $L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  の完全正規直交系  $\{\phi_\alpha\}$  を固定し、

$$\xi = \sum_\alpha \int \xi_\alpha \phi_\alpha \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$$

ついて、定理 (2.1) によって定まる曲線  $\hat{\gamma}$  のパラメータ  $\xi_\alpha$  に対する変分を  $\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha}$  で表す。(8) から、

$$\theta\left(\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha}\right)' = (1 - W)^{-1} \phi_\alpha$$

となる。

$\xi \in L^2([0, 1], \mathbb{R}^n)$  の関数  $F(\xi)$  の勾配ベクトル場  $\left\{\frac{\partial F}{\partial \xi_\alpha}\right\}$  から構成される  $\hat{\gamma}$  の変分

$$Y = \sum_{\alpha} \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} Y_{\alpha}$$

について、部分積分、

$$\sum_{\alpha, i} \int \nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha}) \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} e^{-F(\xi)} D\xi = \sum_{\alpha, i} \int \frac{\partial F}{\partial \xi_{\alpha}} (\nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha})) e^{-F(\xi)} D\xi \quad (10)$$

が可能であるとして、 $(M, g)$  の Laplace-Beltrami 作用素  $\Delta$  との関連を考える。

$$\sum_{\alpha, i} \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\nabla_i f \theta_i(Y_{\alpha})) = \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i^2 f \theta_i(Y_{\alpha}) \theta_j \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) + \sum_{\alpha, i} \nabla_i f \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\theta_i(Y_{\alpha})) + \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i f \omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) \quad (11)$$

( $\cdot$ ) はユークリッド空間  $\mathbb{R}^n$  の標準的な内積であり、 $\{e_i\}$  はその内積に関する正規直交基底とする。 $\xi_j = (e_j, \xi)$  から、 $\frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_{\alpha}} = (e_j, \phi_{\alpha})$  とする。

(11)の最初の和に関し、

$$\theta_j \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) = \int_0^1 (e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha}) dt = \langle e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha} \rangle$$

から、

$$\theta_i(Y_{\alpha}) = \langle e_i, (1-W^*) \phi_{\alpha} \rangle = \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \quad (12)$$

となるように、 $\hat{\gamma}$  の変分の族  $\{Y_{\alpha}\}$  を選ぶ。このとき、(11)の最初の和は、

$$\begin{aligned} \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i^2 f \theta_i \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) &= \sum_{\alpha, i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \langle e_j, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha} \rangle \\ &= \sum_{i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle (1-W) e_i, \phi_{\alpha} \rangle \langle e_j, (1-W)^{-1} (1-W) e_i \rangle \\ &= \sum_{i, j} \nabla_{ij}^2 f \langle e_j, e_i \rangle \\ &= -\Delta f \end{aligned}$$

を得る。

(12)の  $\{Y_{\alpha}\}$  に対し、(11)の最後の和は、

$$\omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) = \sum_{k, l} \xi_k R_{klj} \theta_l \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right)$$

から、

$$\begin{aligned} \sum_{\alpha, i, j} \nabla_i f \omega_{ij} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} \right) \theta_j(Y_{\alpha}) &= \sum_{\alpha, i, j, k, l} \nabla_i f \int_0^1 \xi_k R_{klj} \int_0^1 (e_l, (1-W)^{-1} \phi_{\alpha}) dt_1 dt \cdot \langle (1-W) e_j, \phi_{\alpha} \rangle \\ &= \sum_{i, j, k, l} \nabla_i f \int_0^1 \xi_k R_{klj} \int_0^1 (e_l, e_j) dt_1 dt \\ &= \sum_{i, j} \nabla_i f \int_0^1 t \xi_j \text{Ric}_{ij} dt \end{aligned}$$

である。

(11)の第2の和の  $\sum_{\alpha} \frac{\partial}{\partial \xi_{\alpha}} (\theta(Y_{\alpha}))$  について、リーマンテンソルの反対称性と、

$$\langle W e_i, \phi_{\alpha} \rangle = \int_0^1 (W e_i, \phi_{\alpha}) dt = - \sum_{j, k, l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_{\alpha}} \xi_k \int_0^1 t_j \xi_j R_{ijkl} dt_1 dt$$

および、

$$\sum_{k,l} \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \frac{\partial \xi_k}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl} = 0$$

から、

$$\frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} (\theta_i(Y_\alpha)) = \sum_{j,k,l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl} dt_1 dt + \sum_{j,k,l} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha} dt_1 dt \quad (13)$$

である。

リーマンテンソル  $R$  に対し  $\frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha}$  は、

$$\begin{aligned} \frac{\partial R_{ijkl}}{\partial \xi_\alpha} = & \sum_m \theta_m \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) \nabla_m R_{ijkl} + \sum_m \omega_{mi} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{mjkl} \\ & + \sum_m \omega_{mj} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{imkl} \\ & + \sum_m \omega_{mk} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijml} \\ & + \sum_m \omega_{ml} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijkm} \end{aligned}$$

であり、Levi-Civita接続においては、歪率は0であるので、

$$\sum_j \xi_j \omega_{mj} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) = \theta_m \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' - \frac{\partial \xi_m}{\partial \xi_\alpha}$$

および、

$$\sum_{j,m} \xi_j \omega_{mj} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{imkl} = \sum_m \theta_m \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' R_{imkl} - \sum_j \frac{\partial \xi_j}{\partial \xi_\alpha} R_{ijkl}$$

を(13)に適用して、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} (\theta_i(Y_\alpha)) = & \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \theta_m \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' \nabla_m R_{ijkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \theta_m \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right)' R_{imkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{mi} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{mjkl} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{mk} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijml} dt_1 dt \\ & + \sum_{j,k,l,m} \int_0^1 \frac{\partial \xi_l}{\partial \xi_\alpha} \xi_k \int_0^t \xi_j \omega_{ml} \left( \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \right) R_{ijkm} dt_1 dt \end{aligned}$$

を得る。

## 参考文献

- [1] 藤原 大輔、ファイマン経路積分の数学的方法、シュプリンガー・フェアラーク東京、(1999)
- [2] T. Hiroshima, *A Thought about Feynman Path Integral on Riemannian Manifold*, NUCB Journal of Economics and Information Science Vol. 55 No. 2, (2011) 219–225.



- [3] T. Hiroshima, *Path Space and Laplace-Beltrami Operator on Riemannian Manifold*, NUCB Journal of Economics and Information Science Vol. **56** No. **2**, (2012) 131-138.